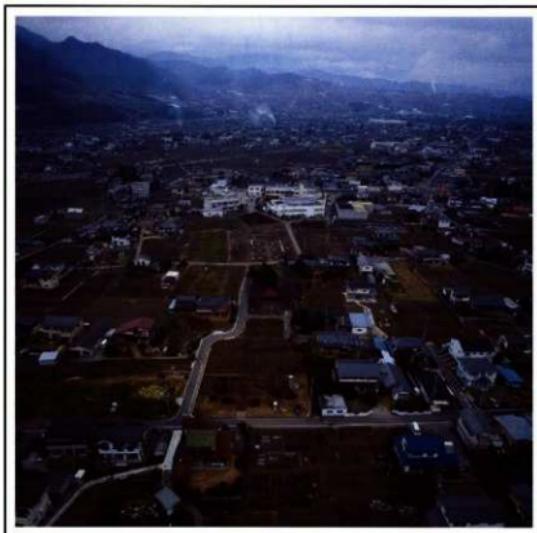


寺本廃寺跡

山梨県史跡寺本廃寺跡試掘調査概要報告書



平成23年3月

笛吹市教育委員会

序

笛吹市は甲府盆地中央部のやや東寄りに位置し、岡銚子塚、竜塚、姥塚などの古墳、甲斐国分寺跡、国分尼寺跡などの古代寺院等多数の史跡があり、保存活用に向けた調査が実施されています。

特に、今回報告する寺本廃寺跡は、山梨県最古の寺院跡として知られ、過去にも山梨県教育委員会、春日居町教育委員会で発掘調査が行われています。これらの調査成果により、中心伽藍及び寺域の範囲が分かってきましたが、まだまだ明確な部分が多く、研究者からは伽藍配置についても金堂、塔、講堂の位置が近すぎるなどの指摘を受けていました。笛吹市教育委員会では、寺本廃寺の不明確な部分の解明と、過去の発掘調査データの検証を目的として、平成 19 年度以降試掘調査を実施するとともに、併せて過去に行われてきた試掘調査データを新たな視点で見直す作業を進めてきました。笛吹市では、これらの成果を報告するとともに文化庁、山梨県教育委員会の指導のもとで寺本廃寺跡の保存整備に役立てていきたいと考えております。

発掘調査にご理解、ご協力をいただいた地権者をはじめ、山梨県教育委員会、山梨県文化財保護審議会、調査検証にご指導いただいた研究者各位に感謝申し上げるとともに、本書が広く活用されますことをご期待申しあげます。

平成 23 年 3 月
笛吹市教育委員会
教育長 山田武人

例　　言

1. 本書は、山梨県笛吹市春日居町寺本における山梨県史跡寺本庵寺跡の埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、平成19年度より平成22年度にかけて笛吹市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は平成19年度を笛吹市教育委員会文化財課小瀬忠秋、溝内淳介が担当し、平成20年度、21年度、22年度を望月和幸が担当した。
4. 本書の執筆、編集は笛吹市教育委員会文化財課、望月和幸が行った。
5. 本書に掲載されている遺物、図版、写真は笛吹市教育委員会で保管されている。
6. 発掘調査、報告書作成にあたり、次の機関、諸氏からご指導、ご協力を賜った。記して感謝申し上げる。
笛吹市春日居町寺本区、文化庁、国士館大学 須田勉、東京大学大学院 佐藤信、山梨学院大学 十数駿武、山梨大学 大隅清陽、笛吹市文化財保護審議会 谷口一夫、長沢宏昌、山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター 小野正文、山梨県立博物館 中山誠二、山梨県文化財保護審議会史跡部会、財団法人山梨文化財研究所 宮沢公雄、平野修、山梨県考古学協会、古代甲斐國官衛研究会
9. 調査組織

調査事務局　　笛吹市教育委員会教育長　山田武人

笛吹市教育委員会部長（次長）早川哲夫（平成19～21年度）　中澤和朗（平成22年度）

笛吹市教育委員会文化財課長　小川勝明（平成19年度）　中山孝仁（平成20、21年度）

小瀬忠秋（平成22年度）

調査担当者　　小瀬忠秋・溝内淳介（平成19年度）　望月和幸（平成20～22年度）

発掘調査作業員　馬渕泰藏　榎原千代子　保坂洋　野沢きみ江　橋田さん子　馬渕松子　志茂聰　名取正司

花村玲子　鈴木智恵美　荒川奈津江　荒川公子　土屋美保子　天川暉美　竹越妙子　矢崎綠

吉岡和恵　高野眞寿美　藤巻淑子　鈴木幸子　神澤時子　三浦佳美　間美代子　矢崎睦美

花村玲子　山貝美春　佐野克也

室内整理作業員　小出切健吾　高野眞寿美　渡辺利江　藤巻淑子　藤原さつき　角田万紀

凡　　例

1. 本書中の地図は、「国土地理院 石和1万5千分の1」をもとに加筆した。
2. 本書における各図の縮尺は各ページに図示する。
3. 本書の「試掘坑の様相表」で用いているエリア、位置標の記述は「寺本庵寺 第1次・2次・3次発掘調査報告書」（1988）において想定している伽藍配置に基づき表現している。

目　　次

序	1
例言、凡例、目次	2
第1章　　調査の概要	
第1節　調査研究小史	3
第2章　　試掘調査	
第1節　地理的環境と歴史的環境	4
第2節　試掘坑の設定	7
第3節　試掘坑の様相	7
第3章　　まとめ（主要伽藍における調査成果の検証）	20

第1章 調査の概要

第1節 調査研究小史

既に春日居町教育委員会刊行の『寺本廃寺 第1次・2次・3次発掘調査報告書』(1988)（以下報告書という）にて研究小史について述べているため本報告書では簡略に示す。

寺本廃寺は奈良時代山梨郡の都寺または、大領（郡衙の長官）もしくは地方豪族の私寺であろうという考え方が昭和13年に大場磐雄氏によって示された。これは、それまでの国分尼寺説を明確に否定したもので、国分寺、尼寺の研究成果を基に否定に関するいくつかの根拠を示している。その後、昭和18年に県史跡調査委員である塙田義延氏による心證を中心とする一帯の調査が行われ、塙田氏の論文の中で寺本廃寺は最初に造立された平斐國分寺跡と推定し、笛吹川の氾濫で一宮村国分に再建されたと推定した。その伽藍は山王神社に金堂があり、その北に講堂、その北の道路付近に東西50余間の土塁があるものと推定した。瓦は川田窯で製作されたものとしている。また、川田瓦窯を発見した中鶴正行氏も、寺本廃寺は奈良時代後期に国分寺として造立され、一宮村国分の平斐國分寺はその後に造建されたものであるという趣旨のことを述べている。

昭和25年になると、石田茂作氏による『甲州寺本廃寺の発掘』が考古学雑誌36卷3号に発表された。そのなかで石田氏は、①寺本廃寺は国分寺ではなく、国分寺の時代（奈良時代中期）よりも少なくとも50年くらい遅る白鳳期に創建された寺跡であろう。②寺城は90間四方で伽藍配置は法起寺式である。③塔は高さ約120尺の五重塔である。との3点を示した。一方で、木下良氏は『国府跡研究の諸問題－平斐國分寺跡をめぐって』（文化史学21号 1967）のなかで、国府地城と寺本地域の土地割分布が同一で他地域と異なる点に着目し、寺本廃寺は国分寺建立以前に国府に接した地方官寺が建立されたと想定している。

以上のように、1988年の寺本廃寺1次、2次、3次発掘調査報告書以前における諸氏の研究では、まず国分尼寺説が否定され、郡寺、豪族私寺、最初の国分寺、地方官寺などの諸説が示されてきた。

それら諸説を踏まえた上で1980年に調査計画が示され、1981年に山梨県教育委員会文化課の小林広和氏、中山誠二氏を担当者として1次調査が、1982年に同小林広和氏を担当者として2次調査が実施された。さらに1986年から87年にかけて山梨学院大学の十菱駿武氏を担当者として3次調査が実施され、3次調査を担当した十菱氏の編集による調査報告書が刊行された。

寺城について報告書は、石田茂作氏(1950)の90間(163.6m)四方よりも狭い方1町(135m)四方との見解を示している。また、南門、西門、北門の一部を確認し、幅約6mの築地が四方に巡ることを確認したと記している。報告書の示す南北築地は現在の集落内道路とはほぼ一致し、東築地は現在の水路と道のラインとほぼ一致する。

伽藍配置について報告書は、伽藍中軸線は寺城中心軸と一致し、方位については「N-5° - E(磁北より) 貞北より50°東に偏している」と記している。伽藍は塔が東、金堂が西に配置される法起寺式で、塔は三重の塔、金堂は五間×三間、講堂は五間×四間と推定している。これら3つの主要建物は屋根が近接するとも述べている。

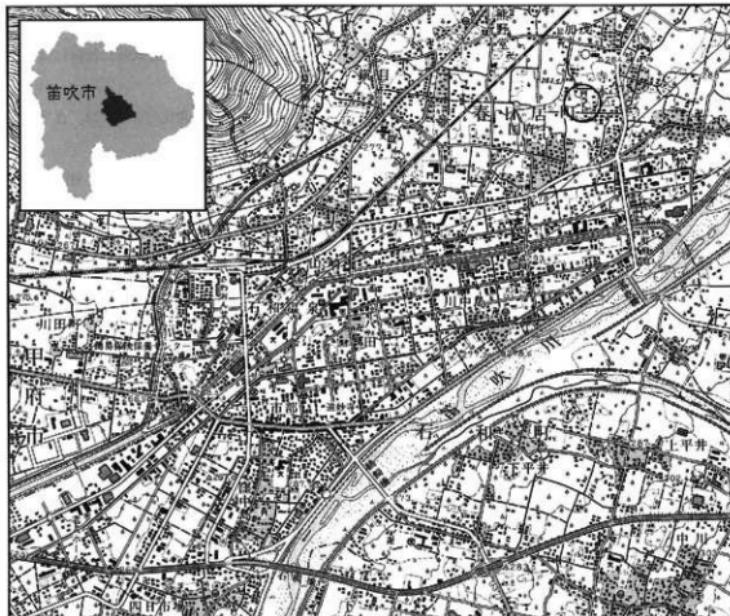
第2章 試掘調査

第1節 地理的環境と歴史的環境

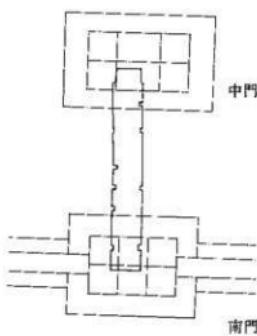
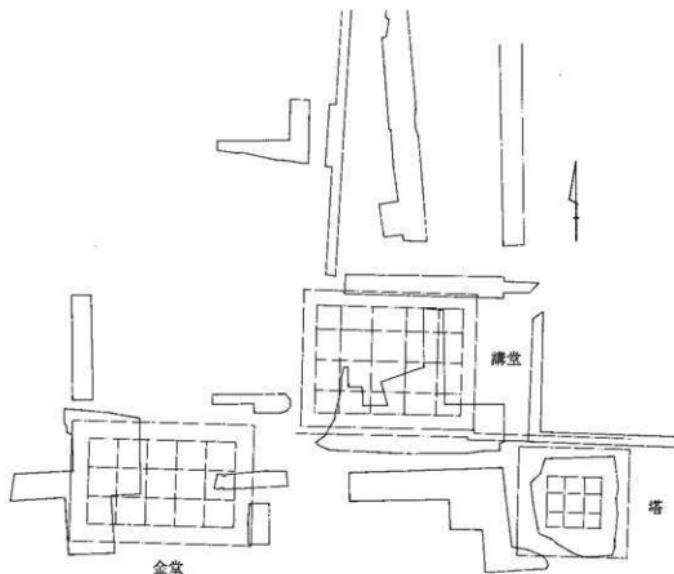
寺本廃寺は、甲府盆地東部、笛吹市春日居町寺本に位置し、北西に兜山、御室山を望み、東から南にかけてやや離れたところを笛吹川が流れる。寺本廃寺は笛吹川支流宮川と鳳山川の間にある微高地にある。しかしながら、一帯は、過去には水害の影響を受けたようで、表土下には砂層や礫層の堆積が見られる。

古代甲斐国は山梨、八代、巨麻、都留の四郡から成り、寺本地域は山梨郡にあたる。山梨郡の郡域は概ね甲府盆地東部にあたり、荒川以東の甲府市、笛吹市石和町の一部と春日居町、山梨市と甲州市一帯とされており、山梨郡には於曾、能呂、林部、井上、玉井、石糸、表門、山梨、加美、大野の10の郷があったとされている。寺本地域は山梨郷にあたる。

寺本地域に近い古墳の副葬品には、馬具や銅碗が見られる。この地域が古墳時代後期には先進的な文化を取り入れた地域であったことが伺える。仏教を受け入れ、それを地域支配に取り入れる下地があり、甲府盆地東部の肥沃な沖積地がもたらす経済力が加わり、寺本廃寺が造営されていったのであろう。

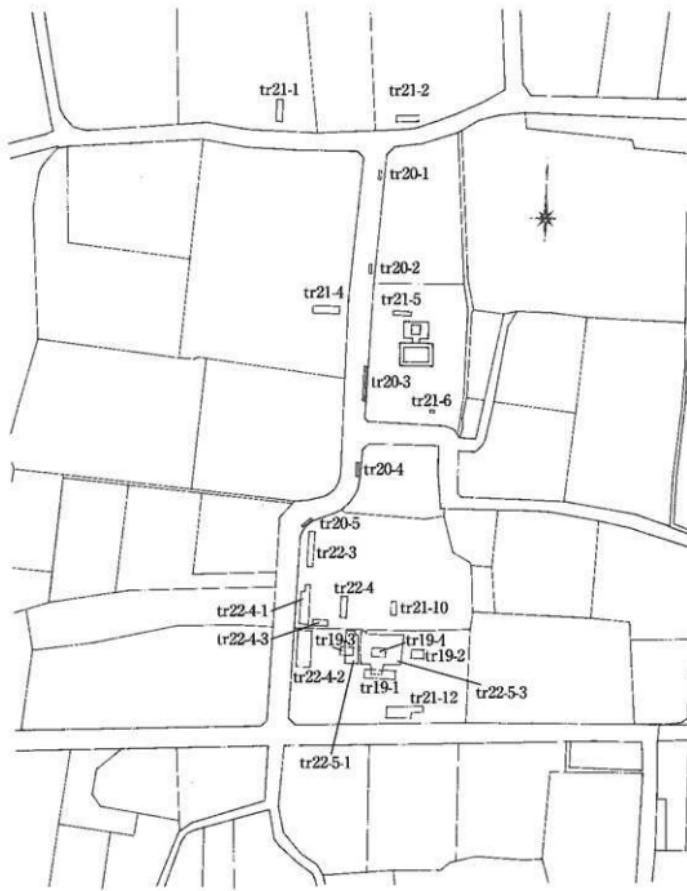


寺本廃寺跡位置図



(1/500)

伽藍配置想定図（報告書より）



(1/1500)

試掘坑配置図

第2節 試掘坑の設定

平成 19 年度調査は、寺本庵寺域内の宅地分譲計画が持ち上がったことを契機に実施された。分譲計画地が寺本庵寺南門及び寺院中軸想定ラインにあたっていたため、市は、重要遺跡保護の立場に立ち、試掘調査後に公有地化している。

調査は、1982 年に実施した寺本庵寺 2 次調査で検出した参道耳石付近の再調査と、想定されている中門基壇南側 3 箇所（南東コーナー、南辺中央付近、南西コーナー）の確認を目的として実施した。

翌 20 年度には、地域要望に基づき計画されていた山王神社西を南北に通る市道（通学路）拡幅に先立つ試掘調査を実施し、道路拡幅部 7 箇所に試掘坑を設定した。結果として、山王神社境内において硬化面を捉えた。山王神社は石田茂作氏が指摘する講堂想定地である。塔との位置関係や石田茂作氏の想定伽藍から、硬化面が講堂基壇である可能性を視野に入れつつ、21 年度の追加調査を実施することとした。

この道路拡幅については、児童の安全な通学のために必要な措置であるとの観点から拡幅を認めたが、「①山王神社境内付近においては下層改良を行わず、路肩も擁壁を打たずに表層に石を並べて地境とする。」「②水路側溝は新たに道路脇に設けず、既存水路に蓋を架け、その外側拡幅部をアスファルト舗装とする。」「③工事の際、文化財課担当の立会いを要す。」等の条件を設け、遺構の保全を行った。尚、当然の事ながら保護層は十分確保されている。

寺本庵寺跡は、平成 21 年 5 月 21 日付、史跡第 29 号として、山梨県史跡の指定を受けた。その後、同史跡を目指すことになるが、平成 21 年 10 月、寺域範囲および伽藍配置における疑問点、不明確な部分を検証することを目的として中心伽藍想定地および寺域想定地外周部を中心に試掘調査を実施した。

この調査は平成 21 年 10 月 1 日から 11 月 13 日にかけて実施し、11 月 19 日に南門跡追加調査試掘坑の埋め戻しを行った。試掘坑の位置は、過去の発掘調査により想定されている伽藍配置、寺域をもとに、北築地、北門、西門付近築地、僧房、東門付近、金堂、中門、西築地、南門、南築地のそれぞれの想定箇所付近に設定、13 箇所において人力での掘削を行った。特に、講堂が金堂、塔に近すぎるとの指摘のあることや、平成 20 年度調査で確認した講堂基壇と思われる硬化面の再検証を目的として、山王神社境内に試掘坑を設定した。南門を想定した試掘坑では瓦の集中が認められたため、重機により拡張した。

平成 22 年度調査では、4 月及び 10 月から 2 月にかけて寺本庵寺内の東門想定地周辺、講堂東回廊想定地、金堂想定地、寺域中軸線及び中門想定地周辺の 17 箇所の試掘坑を設置し、遺構確認を行った。調査の結果、金堂が 1 次調査で想定した範囲の東側まで延びていないことが確認された。また、基本層序の再検証の結果、中世以降の大規模な水田造成が寺域全域に及ぶことが確認され、水田造成時に寺本庵寺前の広いエリアを大きく削平している可能性が高いことが確認された。

第3節 試掘坑の様相

1. 基本層序

平成 19 年度の中門想定地調査において基本層序を

1. 表土、耕作土。下部は褐鉄が沈着して明褐色もしくは橙色に近い色調を呈す。
 2. 暗灰褐色土層。遺物包含、Ⅲ調査（1 次から 3 次）においてはこれも表土と解釈。
 3. 灰黄褐色土層。瓦を大量に包含、褐鉄分を含む。時期不明水田床の影響を受ける層。
 4. 灰茶褐色土層。遺物包含、参道耳石とされた石列の見られる土層。石列は本層下部。
- ととらえ、平成 22 年度の面的調査を行うなかで、水田床土と瓦面、寺本庵寺遺構面と関係をさらに明確にする作業を行ってきた。その結果、寺本庵寺跡の基本層序を
- I. 現耕作土。果樹栽培導入後の耕作層。
 - II. 黄色土。近現代水田に伴う床土。
 - III. 暗灰褐色土層。水田床上下層。

IV. 黄色土。中世から近世水田床上。

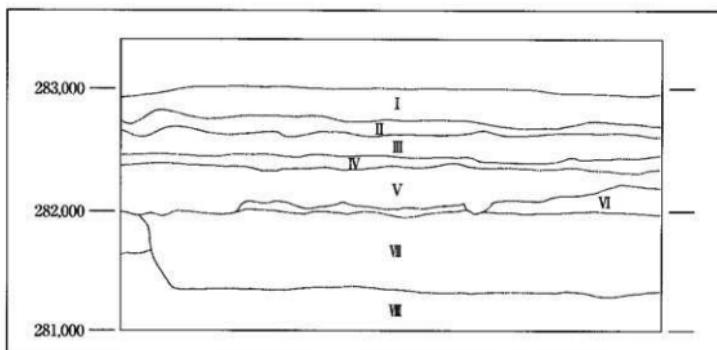
V. 灰茶褐色土層。上層部で瓦片を平面的に包含。茶褐色の縦縞が見える。

VI. 寺本造構残存層（繩面、掘込地表、黒色シルト）。

VII. 造構面（古墳時代＝鬼高期）。

VIII. 砂礫層。

と捉えた。寺本廃寺跡に関する造構が残る可能性がある層は、山王神社境内地など一部を除いて中近世水田面下層から古墳時代造構面の間にあるV、VI層の範囲となる。



2. エリアごとの試掘坑の様相

北築地想定地付近

石田茂作氏は、山王神社北 30m を東西に横切る道を寺本廃寺北辺としている。昭和 61 年から 62 年にかけて実施した寺本廃寺 3 次調査においても、この道付近に寺城北辺を想定し、調査を行っている。調査の結果、この北辺ライン上にやや硬い黒褐色土層上面に広がる玉石が検出された。さらにその北側で砂礫層に達する暗灰黄砂質土層が検出されている。寺本廃寺第 1 次、2 次、3 次発掘調査報告書ではこの成果をもとにやや硬い黒褐色土層上面と玉石の範囲を北門基壇、その外側の暗灰黄砂質土を外周溝と想定している。

また、北築地に関しては、幅 6m の玉石基壇があり、その外側に幅 10m、深さ 1m の溝があるらしいとしている。3 次調査において、基壇面からピット 2 個を検出しているが、このピットは北築地に伴う掘立柱の痕と考えられている。

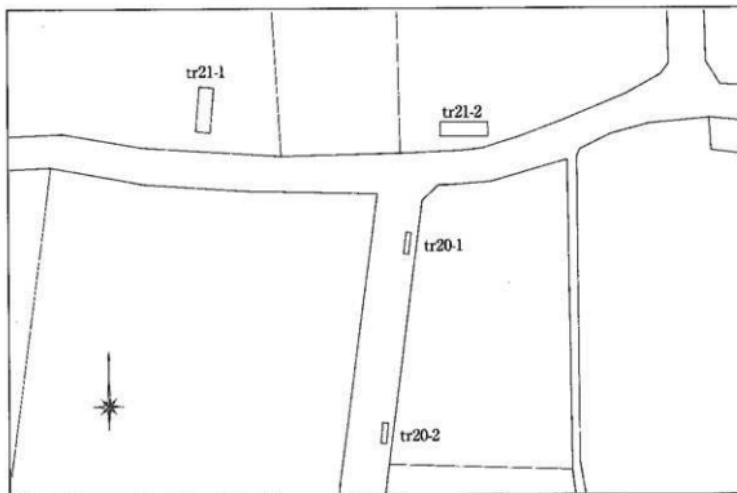
笛吹市教育委員会では、平成 20 年度に北築地想定ライン内側に 1 箇所 (tr20-1)、平成 21 年度に北築地想定ライン上に 2 箇所 (tr21-1, tr21-2) を設定した。

北門想定地西側の tr21-1 からは砂質土を覆土とした溝状の落ち込みが確認され、地表下 1.5 m で幅 1.8m の人頭大螺の集中箇所をとらえた。

北門基壇とされた位置の東に設定した tr21-1 では、直径 70 cm のピット 2 基を検出した。これらのピットは地表下 90 cm の繩面中に掘りこまれており、ピットの間隔はそれぞれの中心間で約 2.8m となっていた。このうち 1 基では、柱痕が確認されている。確認された 2 基のピットは 3 次調査で検出された 2 基と同規模であるが、同一直線上には乗らないことが確認された。

北築地想定地付近試掘坑の様相

試掘坑名	設定の目的	中軸付近における北築地内側縁辺施設の確認目的。
tr20-1	層の上面標高(m)	地表: 283.8m IV層: 283.15m V層: 283m VI層: 282.6m
位置・規模	遺物・遺構	IV層内での土師器片。瓦は少ない。
北築地内側 0.5×2m	所見	IV層が見られることから、中近世水田造営が行われた範囲にあたる。寺本庵寺に関する遺構は捉えられない。
試掘坑名	設定の目的	北築地想定ラインに直行する試掘坑。北築地外周溝の確認目的。
tr21-1	層の標高(m)	地表: 283.75m IV層: 無 砂層
位置・規模	遺物・遺構	砂基調の溝状落ち込みあり。282.25mで幅1.8mの礫集中箇所検出。
北築地中輪西 1.5×5m	所見	表土下に近現代水田床土があり、下層のIV層水面面は無い。溝状落ち込み覆土は砂基調でよどみの跡が見られる。硬化面、版築は確認できない。
試掘坑名	設定の目的	北築地想定ライン上に東西方向に設定した試掘坑。北築地確認目的。
tr21-2	層の標高(m)	地表: 284.04m IV層: 無 磨面: 283.27m
位置・規模	遺物・遺構	平安時代住居跡を283.55mで、礫面中283.15mで直径70cmピット2基検出。
北築地中輪東 4.9×1.3m	所見	直径70cmピットが中心間2.8mの距離で検出された。柱痕有。確認面から30cmの深さが残る。平安時代住居による擾乱を受けている。



北門、北築地想定地付近試掘坑設定図

僧房想定地付近

2次、3次調査において山王神社西の道路下及び道路西の畠で基壇と思われる層が確認された。また、丸石の集まり2箇所と瓦の集中、多くのスス、タールの付着した灯明皿や墨書き器7点が出上した。さらに柱穴と思われるピットが4箇所検出された。これらを受けて報告書は東西2間ないし3間の南北方向の僧房の存在を想定した。

猪吹市教育委員会は平成20年に実施した山王神社境内地の試掘坑(t r 20-3)において硬化面が確認されたことを契機に報告書の示す面との比較を目的として、試掘調査(t r 21-4)を実施した。

t r 21-4は、表土下80cmに中世以降と考えられる水田層があり、さらに表土下120cmでは古墳時代の住居跡が確認された。2つの層に挟まれた40cmの間に、寺本庵寺に関する遺構が残る可能性があるが、この間において山王神社境内で確認されたような明らかな硬化面は確認することが出来なかった。

報告書の示す講堂

1次調査において、講堂を想定した山王神社境内地の試掘調査が実施されたが、調査において講堂の痕跡をとらえることは出来なかった。その結果を受けて実施された3次調査において、神社南側の道路を挟んだ方形の土地より、川原石のまとまりや雨落溝と思われる石列が検出された。報告書では、これらの遺構を根拠に講堂を想定しているが、一方で雨落溝が途中で屈曲することを指摘している。

市教委では、試掘坑(t r 20-4)を設定し、溝堂に伴う硬化面、版築等を確認する調査を実施したが、それらを確認することは出来なかった。

山王神社境内地 = 石田茂作氏の指摘する講堂

山王神社境内付近は、抜き取られた礎石が少なくとも11点置かれている。また、法起寺式伽藍を想定した場合、塔や金堂想定地とのバランスが良い。

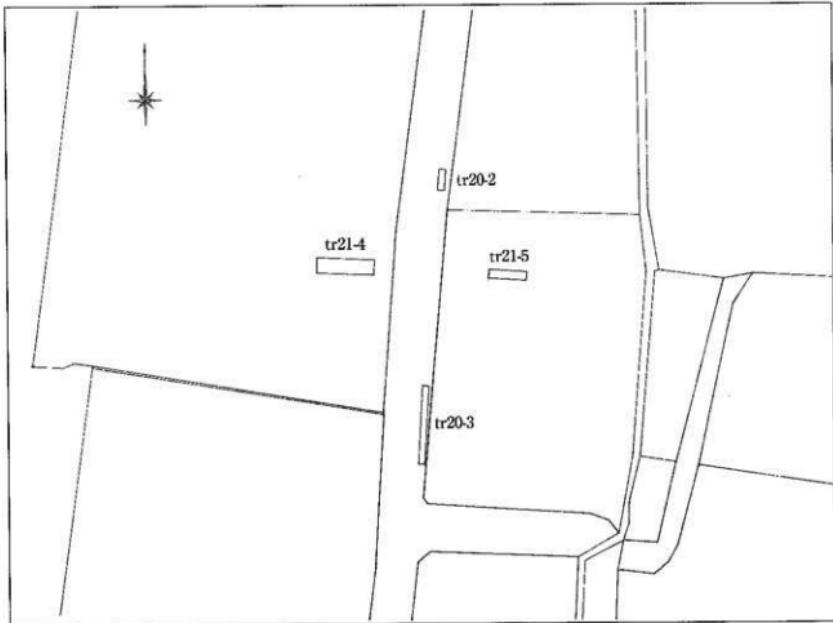
石田茂作氏は山王神社境内地に講堂を想定しているが、報告書では1次、3次調査の成果をもとに山王神社西の道路から畠にかけて僧房を想定している。

山王神社は、かつて高さ1mほどの土壘に囲まれていたが石田氏の調査後に土壘の削平を行っている。また、かつて境内地を囲むようにあった杉林も桜へと植え替えてられており、石田氏の調査時と1次調査実施時とでは境内の環境が大きく変わっていた。

市教委が平成20年度に山王神社境内地西端で行った試掘調査(t r 20-3)では南北8.5mの試掘坑全面において硬化面がとらえられた。さらに、この硬化面の広がりを確認するために実施した平成21年度調査(t r 21-5)においても神社本殿北で東西4mの試掘坑全面にて同質の硬化面がとらえられた。この硬化面は、塔や金堂との位置関係、境内地にみられる多くの礎石などから講堂基壇残存部の可能性が考えらよう。

市教委では、試掘調査による寺本庵寺伽藍の再検証作業を進める一方で、1次、2次、3次調査における写真、図面の検証作業も進めている。この作業の中で、報告書には未掲載の山王神社境内の試掘坑内に礎面が広がる写真を確認している。山王神社東側に設定した各試掘坑や寺域想定地南に設定した試掘坑において砂礫、砂層といった河川氾濫の痕跡がとらえられていることなどから、報告書ではこの礎面を河川の堆積層と判断している。

この礎面と20年度、21年度に確認された硬化面との関係を確認することを目的として、市教育委員会では、平成23年度にこの礎面の再検証を目的とした試掘調査を計画している。



僧房・講堂想定地付近試掘坑の様相

試掘坑名	設定の目的	
tr21-4	層の標高(m)	地表: 283.8m IV層: 282.97m V層: 282.87m VI層: 282.37m
位置・規模	遺物・遺構	V層中282.57mにて古墳時代住居プラン検出。
山王神社西 5.7×1.5m	所見	水田によりIV層までは造成されている。寺本廃寺関連面はV層上面から古墳時代住居跡確認面までの間で求めることとなるが硬化面等僧房痕跡は確認できない。
試掘坑名	設定の目的	山王神社北における遺構確認目的。
tr20-2	層の標高(m)	地表: 284.2m IV層: 283.5m V層: 283.4m VI層: 283m
位置・規模	遺物・遺構	283.4mで土器器片出土。瓦は少ない。
山王神社北 0.6×2m	所見	瓦の出土量も少なく、小片のみである。遺構ととらえられるような硬化面は認められない。

備房・講堂想定地付近試掘坑の様相

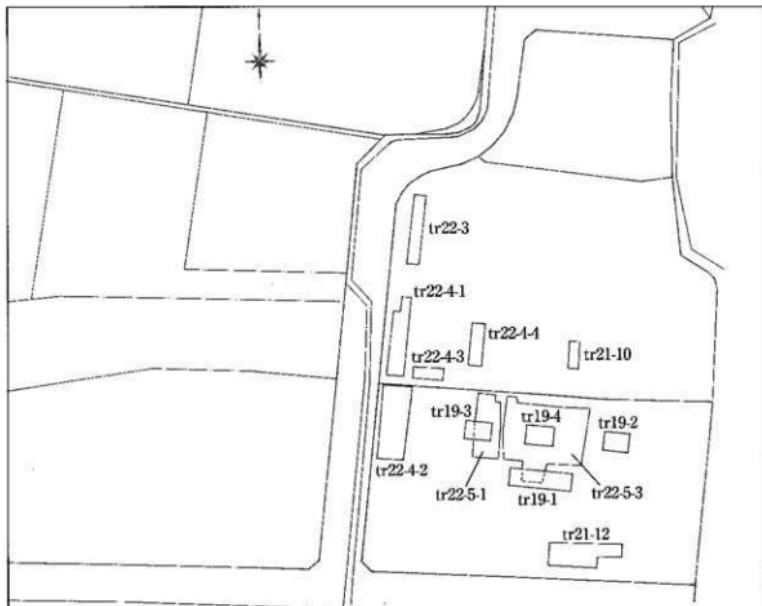
試掘坑名	設定の目的	石田茂作氏の想定する山王神社境内地講堂の検証目的。
tr 20-3	層の標高(m)	地表: 283.5m 硬化面: 283.2m 以下掘削停止
位置・規模	遺物・遺構	基壇を思わせる硬化面が試掘坑内全域にてとらえられ、硬化面上に瓦が散布する。
山王神社境内 西 0.3×8.5m	所見	石田茂作氏が講堂と想定する山王神社境内地で叩き締めたような硬化面を検出した。講堂基壇をとらえた可能性が高い。
試掘坑名	設定の目的	tr 20-3でとらえた硬化面の広がり確認目的。
tr 21-5	層の標高(m)	地表: 283.32m 硬化面: 283m 以下掘削停止
位置	遺物・遺構	基壇を思わせる硬化面が試掘坑内全域にてとらえられ、硬化面上に瓦が散布する。
山王神社本殿 北 4×1m	所見	tr 20-3同様、硬化面の東西方向への広がりが確認された。硬化面が東西、南北方向に面的に広がることから、講堂基壇をとらえた可能性が高まったと思われる。
試掘坑名	設定の目的	tr 20-3、tr 21-5でとらえた硬化面の南側への広がりの確認目的。
tr 21-6	層の標高(m)	地表: 283.37m IV層: 282.87m V層: 不明 碓面: 282.77m
位置・規模	遺物・遺構	282.77mで礎面を検出。
山王神社境内 南 0.9×0.5m	所見	IV層水田床土の影響を受ける範囲にあたる。礎は密集するが石畳のような平坦面を意識していない。礎は拳大よりも大ぶりなものが多い。
試掘坑名	設定の目的	山王神社を講堂と仮定したうえでの東側回廊の検出目的。
tr 22-1	層の標高(m)	地表: 283.45m IV層: 無 V層: 282.95m
位置・規模	遺物・遺構	瓦散布見られるが総量は少ない。明確に回廊跡とできる遺構はとらえられない。
山王神社東 1×5m	所見	IV層水田床土は認められないが耕作が礎面まで及んでおり、遺構を検出できない。
試掘坑名	設定の目的	山王神社を講堂と仮定したうえでの東側回廊の検出目的。
tr 22-2	層の標高(m)	地表: 283.35m IV層: 無 V層: 282.65m
位置・規模	遺物・遺構	瓦散布見られるが総量は少ない。明確に回廊跡とできる遺構はとらえられない。
山王神社東 8×1.6m	所見	搅乱が複層に及んでおり、tr-J2内で検出されたピットと同施設や硬化面は確認できない。
試掘坑名	設定の目的	報告書の示す講堂の確認目的。
tr 20-4	層の標高(m)	地表: 283.2m IV~V層は上層の搅乱を受け不明瞭 V層: 282.4m
位置・規模	遺物・遺構	瓦の出土量は少ない。282.5mより下層には瓦は出土しない。
山王神社南西 0.5×3m	所見	瓦片は小ぶりで総量は少ないが、試掘坑北側が南側に比べて瓦出土量が多い。基壇状硬化面、振り込み地盤面は認められない。

金堂想定地付近

寺本魔寺では、法起寺式伽藍が想定されており、その立場から、石田茂作氏も塔西側の道路がクランク状に屈曲する付近に金堂を想定した。1次調査もその立場に立って実施されている。報告書で幅約2mの帯状の河原石の集積を基壇外装に用いたものと推測しており、瓦の集中範囲と併せて基壇規模を南北10~12m程、東西18m程と推測している。尚、報告書では、前述の規模では柱間のバランスが悪い点を懸念している。

筋吹市教育委員会では、平成20年度、21年度、22年度に試掘調査を実施し、金堂基壇範囲の確認と基壇の残存状況の確認調査を行っている。平成20年度調査では、金堂想定地とされる道路クランク東側(tr20-5)において試掘調査を実施したが、明確な版築土層の検出はされなかった。平成21年度調査では、金堂想定地とされる道路クランク西側(tr21-9)において版築とみられる互層を確認した。互層は地表下わずか25cmから見られ、硬く締められたローム質の黄色土と暗褐色土が各層5cmから15cmの厚さで認められた。

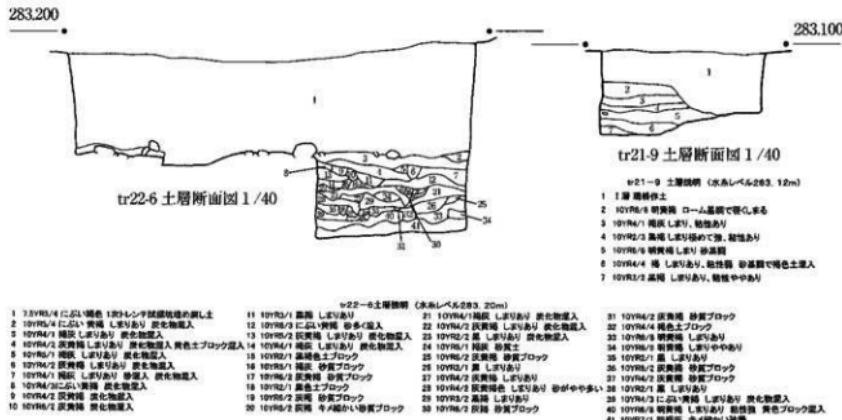
平成22年度には道路クランク部東側(tr22-3)において試掘調査を実施した。この調査では現地表下50cmで中世以降に比定される水田床土が見られ、その下層50cmで古墳時代の住居跡プランが複数検出された。水田床上下層から古墳時代住居確認面の間にtr21-9でみられたような斑築状の土層は認められない。また、tr22-3では基礎地盤を思わせるような土層も認められない。22年度にはクランク道路西側において1次調査で検出された帶状の川原石の再検出を目的とした調査(tr22-6=23年度刊行報告書に掲載)も行っているが、その際、帶状川原石下層で版築状互層を検出している。これらの調査結果から、クランク道路を挟んだ東西では上層の様相が異なることが確認された。



金堂、中門、南門付近試掘坑設定図

金堂想定地付近試掘坑の様相

試掘坑名	設定の目的	報告書の示す金堂の確認目的。
tr 20-5	層の標高(m)	地表: 283.15m IV層: 282.8m V層: 282.6m
位置・規模	遺物・遺構	IV層～V層上面にて瓦面検出。明確な基壇、基礎地盤は検出されていない。
金堂(道路東) 0.5×2m	所見	水田によりIV層までは造成されている。IV層とV層の境に瓦面が認められる。
試掘坑名	設定の目的	報告書の示す金堂の確認目的。
tr 21-9	層の標高(m)	地表: 283.02m 版築層: 282.77m
位置・規模	遺物・遺構	282.77mで版築状互層を検出。
金堂(道西) 1×1.3m	所見	狭小範囲ではあるが、ローム質の黄色土と暗褐色土の互層を検出。各互層の幅は5cmから15cmである。金堂基壇残存部としての期待が持たれる。
試掘坑名	設定の目的	報告書の示す金堂の確認目的。
tr 22-3	層の標高(m)	地表: 283.2m IV層: 282.7m 古墳時代住居確認面: 282.2m
位置・規模	遺物・遺構	IV層下層に黒褐色がみられ、282.2mで複数の古墳時代住居プランを検出できる。
金堂(道路東) 1.5×9.5m	所見	V層が不明確。かわりに黒褐色の層が見られる。黒褐色層は古墳時代住居覆土と思われ、IV層造成がV層を抜き住居確認面に及んでいる可能性が高い。
試掘坑名	設定の目的	報告書の示す金堂の確認目的。金堂南限とされる帶状の川原石面の確認目的。
tr 22-6	層の標高(m)	地表: 283m 帯状川原石面: 282.2m
位置・規模	遺物・遺構	報告書の帶状の川原石面を282.2mで確認。
金堂(道路西) 1×3m	所見	帶状の川原石面標高は282.2mであり、tr 21-9で見られた版築状互層よりも57cm低い。



金堂基壇土層断面図

中門想定地付近

昭和 57 年に実施された 2 次調査では、中門基礎と南門基礎基盤、参道耳石が確認された。報告書では、玉石が広がる範囲や礫石掘えつけ用の根石を 1 箇所確認したことと、先に検出した金堂と、すでにわかっている塔心礎との位置関係から中門と想定している。また、中門想定地から南に延びる石列を参道西側の耳石としている。基壇の築成については据り込み地業を行わず、基壇を強固に築き上げるために大小の玉石を多量に入れ込んでいると記している。参道耳石については、中門と想定された玉石礫の集中範囲と南門と想定された玉石礫の集中範囲を結ぶ南北方向の一列の石列をもって想定されている。

参道位置と幅の確定は、寺域中軸線を決める有効な手段であるが、2 次調査においては調査範囲が限定されていたため参道耳石とされる石列の片側を検出するに至らなかった。市教委では、当該地の公有地化に伴い、もう片側の石列の検出と中門の検証を目的として平成 19 年度、22 年度、計 2 回の追加調査を行った。

平成 19 年度調査においては、もう一列の石列検出には至らなかったが、報告書で想定されている中門南東コーナー付近の玉石礫の密度が西側に比べて薄いことが確認された。また、玉石礫面は黒褐色土中に有ることや、地山層とされる砂礫層は玉石礫面よりも 50 cm 以上下層にあることが確認された。

平成 20 年度、21 年度の調査では、中世以降の水田床土の搅乱が、広範囲に及び、その深さも玉石礫面近くまで及んでいることが確認された。

平成 22 年度の試掘調査（t r 22-5-3）では、約 12m × 10m に及ぶ試掘坑を設定した。この調査において、参道耳石とされた石列の 3m 西で、同軸方向を向く石列を確認した。また、中門と想定された玉石礫面についても、人頭大穀を集積した部分と拳大以下の礫を選択して配置している部分があることを確認した。また、人頭大穀の下に拳大穀が散かれている箇所もみられた。t r 22-4-1、t r 22-4-3 は中門から張り出す回廊をとらえることを目的とした試掘坑である。この試掘坑においては水田床土直下におびただしい量の礫密集箇所を確認した。

中門付近の試掘調査において、布目瓦は中世以降の水田床土直下で平坦に出土する傾向がみてとれた。この傾向は、金堂想定地東側の t r 20-5、t r 22-3 などでもみられた。

中門想定地付近試掘坑の様相

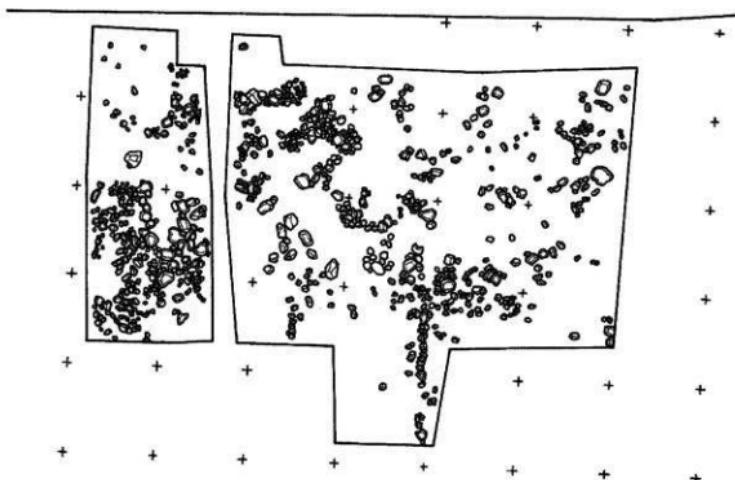
試掘坑名	設定の目的	中門南の参道耳石とされる石列の確認目的。
t r 19-1	層の標高 (m)	地表: 282.95m IV 層: 282.25m V 層: 282.1m VI 層: 281.65m
位置・規模	遺物・遺構	参道耳石とされる石列を標高 282 m で確認。
参道 7 × 2 m	所見	参道耳石とされる石列は長軸 20 ~ 25 cm。中門想定地側は小口積みで 2 层、南門側では横口積みで 1 层検出されている。
試掘坑名	設定の目的	中門想定範囲南東コーナーの検証目的。
t r 19-2	層の標高 (m)	地表: 283 m IV 層: 282.45m V 層: 282.25m VI 層: 281.65m
位置・規模	遺物・遺構	瓦は IV 層と V 層の間に多い。V 層を 10 cm 剥り込むと古墳時代土器が多い。
中門南東隅 付近 3 × 2 m	所見	V 層上面の礫は報告書の示す密度よりも薄い。明確な硬化面も認められない。
試掘坑名	設定の目的	中門想定範囲南西コーナーの検証目的。
t r 19-3	層の標高 (m)	地表: 282.95m IV 層: 282.35m V 層: 282.15m VI 層: 281.45m
位置・規模	遺物・遺構	IV 層土器は 10 世紀以降が多く V 層土器は古墳時代が多い。
中門南西隅 付近 3 × 2 m	所見	明確な硬化面は認められないが、V 層上面礫は t r 19-2 よりも密度が濃く、黒褐色シルト上 282.2 m にある。

中門想定地付近試掘坑の様相

試掘坑名	設定の目的	中門想定範囲の検証目的。
t r 19-4	層の標高(m)	地表: 282.9m IV層: 282.35m V層: 282.2m VII層: 281.5m
位置・規模	遺物・遺構	V層中には古墳時代土器が多く、V層中に柱痕入りピット、溝状遺構がある。
中門南辺中央 3×2m	所見	t r 19-3でとらえたV層上面の黒褐色シルトが広がる。明確な硬化面は認められない。層序は古い順に、柱痕入りピット→溝状遺構→寺本廃寺→IV層水田となる。
試掘坑名	設定の目的	中門からの回廊確認目的。
t r 20-7	層の標高(m)	地表: 283.1m IV層: 282.3m V層: 282.2m 水路の影響で掘削停止
位置・規模	遺物・遺構	IV層とV層境付近より瓦が出土するが量は少ない。
中門東 0.5×4m	所見	柱穴、硬化面等確認できない。
試掘坑名	設定の目的	中門北辺の確認目的。
t r 21-10	層の標高(m)	地表: 283.42m IV層: 283.02m V層: 282.82m VII層: 282.02m
位置・規模	遺物・遺構	V層上面で瓦小片が出土するが量は少ない。V層中282.27mに焼土がある。
中門北 1.5×2.9m	所見	明確な硬化面は認められない。V層中に焼土が見られることから住居跡の存在が想定できる。
試掘坑名	設定の目的	中門から西に延びる回廊の確認目的。
t r 22-4-1	層の標高(m)	地表: 283.2m IV層: 282.65m V層: 282.5m
位置・規模	遺物・遺構	拳大礫の密集個所が検出された。
中門西回廊 2×9m	所見	疊密集部の最も低い部分で281.9m、最も高い部分で282.35mとなる。上層には乱れているがIV層水田面があり、水田造営後に振り込んで投入したものではない。
試掘坑名	設定の目的	中門から西に延びる回廊の確認目的。
t r 22-4-2	層の標高(m)	地表: 283m IV層: 282.5m
位置・規模	遺物・遺構	南北方向にIV層に振り込む人頭大石列を検出。
中門西回廊 3×8m	所見	IV層に振り込む石列は大ぶりの礫を用いている。IV層上の遺構であるため、寺本廃寺跡に関する構造ではない。
試掘坑名	設定の目的	t r 22-4-1の疊密集範囲の確認目的。
t r 22-4-3	層の標高(m)	地表: 283.15m IV層: 282.55m
位置・規模	遺物・遺構	282mでt r 22-4-1で検出したかまほこ状の疊密集南限をとらえた。
中門西回廊 3×1.2m	所見	疊密集部の上層にはIV層がみられることがから、IV層水田造営後のものではない。尚、密集部上層にて明確な硬化面は認められない。
試掘坑名	設定の目的	t r 22-4-1の疊密集範囲の確認目的。
t r 22-4-4	層の標高(m)	地表: 283.1m IV層: 282.55m V層: 282.45m
位置・規模	遺物・遺構	IV層とV層境付近より瓦が出土するが量は少ない。282.3mにて住居跡検出。
中門北 1.3×4.5m	所見	t r 22-4-1の疊密集範囲は本試掘坑まで及んでいない。V層中にて住居跡が検出されている。明確な硬化面は認められない。

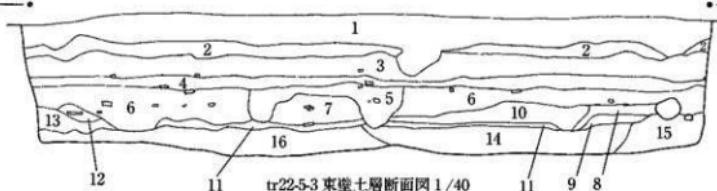
中門想定地付近試掘坑の様相

試掘坑名	設定の目的	中門の確認目的。tr 19-3を拡張した試掘坑。
tr 22-5-1	層の標高(m)	地表: 283m IV層: 282.45m V層: 282.3m
位置・規模	遺物・遺構	V層上面で瓦が平面的に出土する。V層上面の瓦層下層に礫面が認められる。
参道 2. 5×9m	所見	V層上面にみられる礫密度はtr 19-2の礫よりも濃い。試掘坑内中央付近の礫密度が濃く、大ぶりな礫を用いるが南側では小ぶりが礫が見られ、南に下り傾斜を持つ。
試掘坑名	設定の目的	中門の確認目的。tr 19-1, 2, 4を拡張し、tr 22-2と統合した試掘坑。
tr 22-5-3	層の標高(m)	地表: 283m IV層: 282.45m
位置・規模	遺物・遺構	礫面、参道耳石とされる石列(東列、西列、外外幅3m)確認。礫面下層に版築状互層検出。
中門 9×9m	所見	人頭大のやや大ぶりの礫が面的に広がり、その下面に拳大以下の礫が面的に広がる部分がある。これらの礫は厚さ10cm程の黒褐色シルト内にあり、黒褐色シルト下層の茶褐色土中にも厚さ5cm程度の黒褐色シルト層が2層みられる。強固に付き固めたようなしまりではないが、黒褐色シルト質土を用いた互層構造の上に小ぶりな礫、大ぶりな礫を入れているように見える。



中門付近礫平面図 (tr22-5-1-tr22-5-3) 1/100

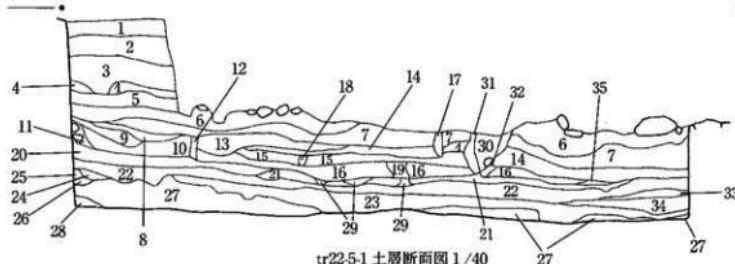
283.100



tr22-5-3 土層断面 (水位レベル 283.10m)

- | | |
|--|---------------------------------|
| 1 常滑粉砂土 | 8 10YR5/7 黒褐色 |
| 2 Ⅲ層 10YR5/9 明暗 水田底土 | 9 10YR5/4 にない黄褐色 しまり強 線状褐色斑子認入 |
| 3 Ⅳ層 7 10YR4/1 橙灰 水田底土下層 | 10 10YR6/4 にない黄褐色 しまり強 線状褐色斑子認入 |
| 4 Ⅴ層 10YR5/6 明黄色 下部に布目瓦入 下部に布目瓦入 11 10YR5/2 黑 しまり強 色化物認入 | |
| 5 10YR5/2 黑色 布目瓦片混入 水田底土下層 | 12 10YR5/2 黄褐色 色化物認入 |
| 6 10YR5/3 橙褐色 しまり強 布目瓦上層に認入 | 13 10YR5/2 黑褐色 色化物認入 |
| 7 10YR5/3 橙褐色 布目瓦入 | 14 10YR5/2 黑褐色 色化物混入 今木南山以東連続層 |
| 8 10YR5/4 橙褐色 沙漠風 | 15 10YR5/2 にない黄褐色 |
| | 16 10YR5/4 にない黄褐色 |

283.000



tr22-5-1 土層断面 (水位レベル 283.00m)

- | | |
|--|--|
| 1 常滑粉砂土 | 11 10YR5/2 黄褐色小ブロック混入 黄化 色化斑 21 10YR2/1 黑色シルト層 |
| 2 Ⅲ層 10YR5/9 明黄色 水田底土 | 12 10YR5/4 橙褐色 水田底土 |
| 3 Ⅳ層 10YR4/1 橙灰 水田底土下層 | 13 10YR5/3 にない黄褐色 色化物認入 |
| 4 Ⅴ層 10YR5/6 黑色 布目瓦下部に布目瓦入 下部に布目瓦入 14 10YR5/1 黑色 水化物認入 | 15 10YR5/2 黑褐色 水化物認入 |
| 5 10YR5/6 黑色 布目瓦片混入 水田底土下層 | 16 10YR5/4 にない黄褐色 水化物認入 |
| 6 10YR5/2 黄褐色 しまり強 色化物混入 塗膜層 | 17 10YR5/6 明黄色ブロック |
| 7 10YR5/4 橙褐色 しまり強 水田底土 | 18 10YR5/6 黑褐色ブロック |
| 8 10YR5/3 橙褐色 色化物認入 | 19 10YR5/1 黑褐色ブロック |
| 9 10YR5/7 黄褐色 沈灰 色化物認入 | 20 10YR5/1 黑褐色 色化物認入 |
| 10 10YR5/2 にない黄褐色 色化物認入 | 21 10YR4/4 黑 |
| | 22 10YR5/2 黄褐色色化物シルト層 |
| | 23 10YR2/1 黑色シルト層 |
| | 24 10YR2/1 黑褐色ブロック |
| | 25 10YR5/7 にない黄褐色ブロック |
| | 26 10YR5/4 にない黄褐色ブロック |
| | 27 10YR5/6 黑褐色シルト層 |
| | 28 10YR5/1 黑褐色シルト層 |
| | 29 10YR5/2 黄褐色シルト層 |
| | 30 10YR5/2 にない黄褐色 小礫混入 |
| | 31 10YR5/1 黑 |
| | 32 10YR5/2 黑 |
| | 33 10YR2/1 黑色シルト層 |
| | 34 10YR5/2 黄褐色シルト層 |
| | 35 10YR5/1 黄白 サボブロック |

南門・南築地想定地付近

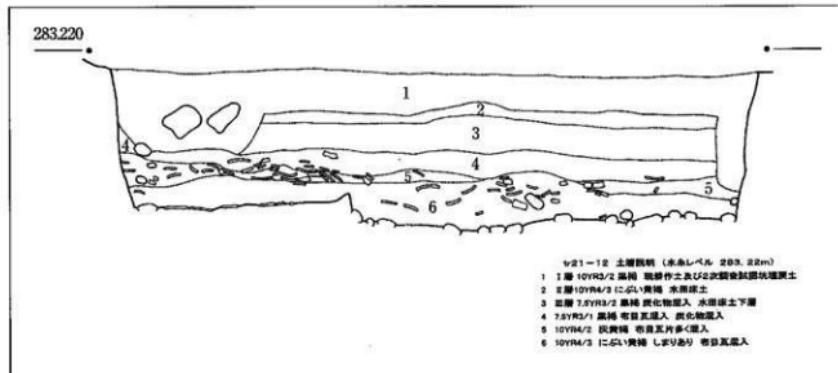
南門調査は昭和57年の2次調査で実施された。報告書は、おびただしい量の瓦の散乱状況や瓦面下層でとらえられた南北約5m範囲に広がる玉石群、玉石群を区切る楕円形の大石などの調査成果を根拠に南門を想定している。この玉石群の広がりは、道路を挟んだ南側にも続いており、基壇の南北幅を約10mに復元し、基壇の出を中門と同様に7尺とすると梁行2間で10尺等間と理解できる。桁行も10尺等間とし、桁行三間、梁行二間の門と想定した。一方で、報告書には、南門基壇より7m南で礎石及び根石と考えられる遺構が確認されたことが記されている。

笛吹市教育委員会では、平成21年度、南門想定地北東部にtr21-12を設定、試掘調査を実施した。調査の結果、地表下60cm付近から130cmの深さにかけておびただしい量の瓦片が出土した。特に試掘坑東側では、丸瓦が北東を向いて折り重なっている様子が確認された。瓦は、試掘坑西側では高い位置から出土し、試掘坑東側では低い位置から出土する傾向があった。瓦面下層は西側が疊面であったが、東側の丸瓦集中部付近の下層には褐色土があり、さらに下層には灰色砂層がみられた。この試掘坑からは、基壇片とみられるような硬質ブロックは確認されていない。

中門調査において、参道耳石と考えられる石列がこれまでの想定と逆の西側で検出された。これを受け、南門の位置も今までの想定よりも3m西に見直す必要があろう。一方で、南門想定地より7m南で検出されている礎石や根石については概ね参道耳石とされる東側石列の延長線上にあるため、再検証する必要があろう。

南門・南築地想定地付近試掘坑の様相

試掘坑名	設定の目的	報告書の示す南門想定地の確認目的。
tr21-12	層の標高(m)	地表: 283m IV層: 282.32m V層: 281.57m
位置・規模	遺物・遺構	多量の布目瓦が282.37mから281.67mの間に見られ、丸瓦の集中箇所がある。
南門東 8.3×3m	所見	布目瓦堆積面がかまぼこ状になる。試掘坑北東端で丸瓦が北東の向きを指し折り重なり出土する。瓦出土標高は西が高く東が低い。



tr21-12 土層断面図 1/40

第3章 まとめ

寺本廃寺跡は石田茂作氏の調査以来法起寺式とされてきた。寺本廃寺第1次・2次・3次発掘調査報告書（以下報告書という）に記す調査もこの法起寺式を念頭にトレーニング位置を設定し、確認された石列、玉石の集積を以って伽藍を確定する作業を行ってきたとのことである。

寺域北辺については、築地跡、外周溝、掘立柱の並びなどにおいて断片的に可能性を示す遺構はあるものの、面的な根拠を見出すには至っていない。東辺については河川氾濫による砂礫層の堆積、中世遺構の存在などにより、寺域の確定はより難しい状況にある。西辺については耕作者から帶状の礫集積部分があることが聞き取れた。早急に確認調査を行うことをとした。また、報告書に示された西門礎石については周囲で確認されている鬼高階住居確認面よりも下層にあることから「落とし」が行われていると思われる。よって、礎石の原位置を示すものではないが、大きな距離を移動しているものとは考え難い。尚、この西門礎石が確認された畠は晴天が続くと表面耕作土が赤褐色に見える。地下の比較的浅い部分に赤褐色土の供給源となるような異質な土（基壇など）が存在する可能性を期待し、今後追加調査を行う計画である。

南辺については、想定される中門と南門の距離が近すぎるなどの疑問が残る。また、報告書にもあるように想定南門址南辺より7m南に礎石と思われる大振りな石や楕円状の集石が確認されている。寺域南辺がやや南に延びる可能性も視野に入れての追加調査が必要になる。

寺の中軸線を探る結果として、中門想定地から南に延びる2列の石列の存在が確認された。これを参道遺構と解釈するならば参道は、正方位より東に概ね2度20分偏していることになる。この角度は石田茂作氏が示す塔礎石に基づく軸線「正しく東西南北を指さず、西南に6度偏している」に対してやや開きがあるが、石田氏が磁北をとっているならば約1度の誤差となる。報告書による方位は「N-5°-E（磁北より）真北より50°東に偏している」とある。寺本廃寺における磁北は真北より5度4分9秒西に偏していることから、この記述は磁北より5度東に偏し、真北より50分東に偏していると解釈できる。この報告書の示す方位も2次調査で検出された参道耳石を根拠にしたものであろう。

寺本廃寺寺域内は中世以降、大規模な水田造成が行われた様子が上層より確認できる。その造成は山王神社境内地（講堂）、本概報が示す金堂想定地、塔心礎周辺などを残し寺域内の建物基壇や生活面を削平したものと考えられる。瓦についても、水田床土直下に平面的に出土する状況から、水田造成時に床土への影響を減らすべく平坦に均している可能性がある。また、平成22年度調査において、水田床土上層から掘り抜いて瓦を一括発表している個所が見つかっている。このことから、IV層水田床土と瓦面の間に水田造成の影響を受けていない層を見出すことが出来なければ報告書に見られるような瓦の集積を根拠に伽藍配置を想定することには無理があると云わざるを得ない。

寺本廃寺の伽藍配置について、近年の調査及び検証作業を進める中で、少なくとも

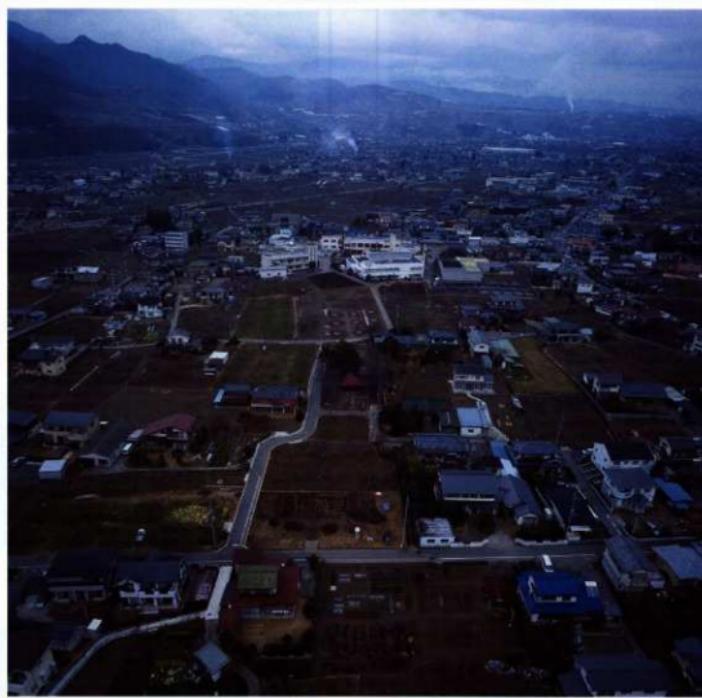
- ①講堂が報告書想定位置よりも後退し、山王神社境内地に収まる可能性が高い。
- ②金堂は報告書が示すよりも西で完結する可能性が高い。
- ③中門は報告書が想定する位置よりも3m西に寄る可能性が高い。
- ④寺本廃寺寺域内は中世以降の水田造成により大規模に削平され、中門基壇はほぼ削平された可能性が高い。
- ⑤参道耳石と思われる石列を根拠にするならば寺本廃寺軸線は真北に対して概ね2度20分東に偏している。
という点が確認された。

一方で、

⑥金堂、講堂の範囲、規模が明確でない。

⑦南門と中門が近すぎる。

という課題が明確になった。今後、これらの課題を探るための調査が必要になってくる。



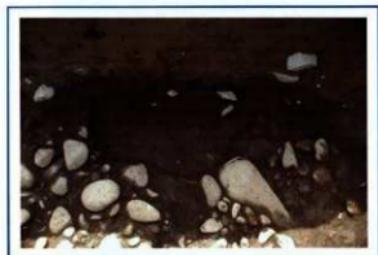
空撮全景



北築地想定地付近



北築地想定地 tr 21-1 土層断面



北築地想定地 tr 21-2 柱穴検出状況



山王神社西、僧房想定地付近



山王神社西僧房想定地古墳時代住居検出状況



山王神社境内地礎石集積状況



山王神社木殿下礎石



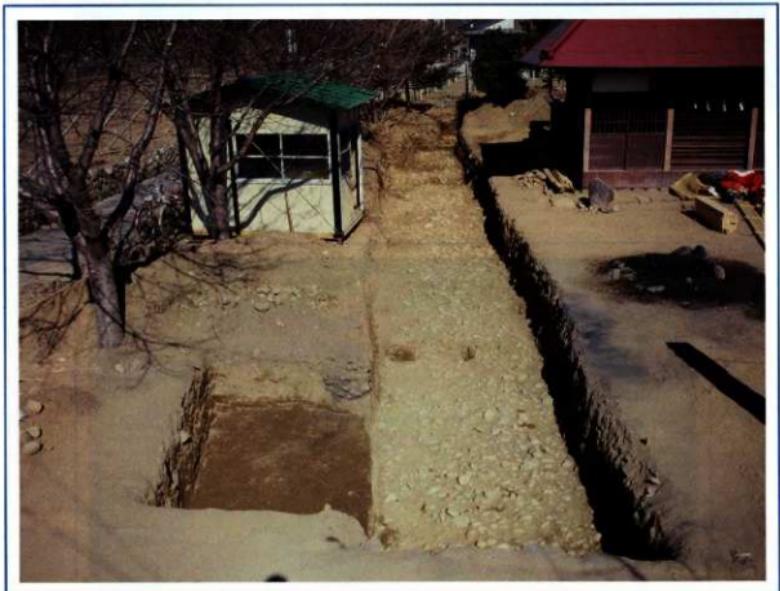
山王神社境内地再利用礎石



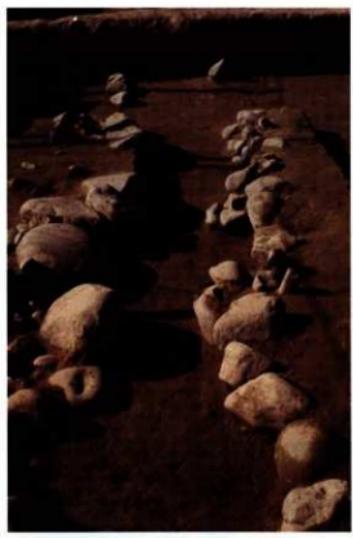
山王神社境内地 tr 20-3 硬化面検出状況



山王神社境内地 tr 21-5 硬化面検出状況



山王神社境内地 tr-E 褐面検出写真（1次調査）



講堂想定地 tr - 02 講堂雨落溝とされた石列
(3次調査)



塔心礎北 tr - M 1 講堂雨落溝とされた石列東延長部
(3次調査)



塔心礎 tr - A (1次調査)



金堂想定地東
tr 22-3
土層断面



金堂想定地
tr 21-9
版塗状土層



金堂想定地
tr-D
帶状石列（1次調査）



中門想定地付近



中門想定地北西 tr 22-4-1 IV層下層襍層



中門想定地西 tr 22-4-2 IV層上層石列



中門・参道想定地 tr 22-5-3 参道耳石



中門想定地 tr22-5-3 石列、襍面（東より）



中門想定地 tr 22-5-3 空撮



中門想定地 tr 22-5-1 碓面下層断面



中門想定地 tr 22-5-3 碓面下層



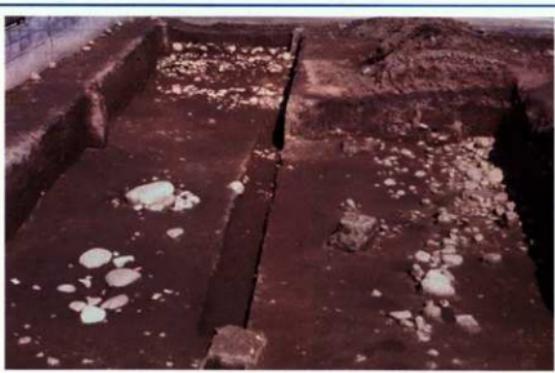
南門想定地付近 tr 5 - 2



南門想定地 tr 21 - 12 瓦面検出状況



南門想定地 tr21-12 丸瓦検出状況（断面）



南門想定地南 tr - H南 碓石状跡（2次調査）

報告書抄録

ふりがな	てらもとはいじあと						
書名	寺本廃寺跡						
副書名	山梨県史跡寺本廃寺跡発掘調査概要報告書						
シリーズ名	笛吹市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第21集						
編著者名	望月和幸						
編集機関	笛吹市教育委員会						
所在地	〒406-0031 山梨県笛吹市石和町市部 809-1 TEL.055-261-3342						
発行年月日	2011年3月30日						
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市	遺跡番号				
寺本廃寺跡	山梨県笛吹市 春日居町寺本			35° 39' 53"	138° 39' 17"	2008.2 ~ 2011.3	伽藍検証
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
寺本廃寺跡	寺院跡	古代	基壇状版築 礎敷遺構	布目瓦 土師器	白鳳期寺院跡		

Teramoto-Haiji

The Report of Archaeological Test Survey of
An Ancient Temple Ruins in Teramoto, Kasugai

2011, 3

Fuefuki City Board of Education